

氏 名	みなみ ともこ 南 智子
学位(専攻分野)	博 士 (学 術)
学 位 記 番 号	博甲第 1123 号
学 位 授 与 の 日 付	令和 6 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研 究 科 ・ 専 攻	工芸科学研究科 建築学専攻
学 位 論 文 題 目	ボッロミーニ作品の自然の模倣と <i>capriccio</i> —サンティーヴォ・アッラ・サピエンツアとカサ・ディ・フィリッピーニの分析—
審 査 委 員	(主査)教授 西田 雅嗣 教授 清水 重敦 准教授 大田 省一

論文内容の要旨

本学位申請論文は、イタリア・バロックの建築家フランチェスコ・ボッロミーニ(1599–1667)の二つの作品、サンティーヴォ・アッラ・サピエンツア教会堂とカサ・ディ・フィリッピーニを、今に伝わる図面や文書の史料批判と、これらの建築を描いた歴史的史料の図面と建築物そのもの、そして同時代史料を用いた考古学的分析に基づいて詳細・緻密に分析し、ボッロミーニ作品について、従来の定説とは異なる特質を読み取った論文である。【序】では、ボッロミーニに関する学説史や先行研究の中に本研究の目的と意図の意義と独自性、そして厳密な史料批判と作品分析に立脚する本学位論文の方法論の妥当性を論じ、反古典主義の奇想の造形がボッロミーニ作品の特質であるという従来の見方に対して、ボッロミーニ自身の意図は古典古代に倣うことであり、古典主義的な自然観に立脚する幾何学性や古代の範例重視が彼の作品の特質であることを明らかにするという本論文の目論見が述べられる。【第一章】はサンティーヴォ・アッラ・サピエンツア教会堂を取り上げる。六芒星形とも正六角形とも見做せる特異な平面に着目し、出版図面と自筆図面の比較検討、古代とルネサンスにおける類似建築の検討を経て、ボッロミーニは正六角形から平面形を創出する意図を持っていたことを明らかにし、円と正六角形が古代の考えに根ざす自然の模倣だったと結論づける。【第二章】と【第三章】はカサ・ディ・フィリッピーニを取り上げ、【第二章】では出版図面の史料批判を手稿図面との詳細な比較で行い、出版図面の史料的意義を明らかにし、いかにして、そしてどのようなボッロミーニの造形意図が読み取れるかを論じる。【第三章】では、手稿図面と手稿テキストに見られる二つの特異な形の柱頭を、古代とルネサンスの先例を調査し比較分析することで、一見奇妙なボッロミーニの柱頭が実は古典の範例に従う造形であり、不变の「芯」と、自由な表現を許容する装飾的な部分から成り立つという示唆に富む見解を提示する。【第四章】では、【第一章】～【第三章】で論じたボッロミーニの特質を、バロック時代に著されたボッロミーニ伝の中に、用語の面から再度検討する。*capriccio* という語に注目し、この語が、古代芸術から学んだ古典主義的知識の裏付けを前提とした、模倣によらない芸術家の独創を示す語であると結論づける。【結】は、【第四章】のこの結論を展開し、17世紀バロック時代における自然の模倣が、後に古典主義と見做される古代の秩序原理や造形原理に根ざす

ものであり、それを *capriccio* という、模倣によらない独創が補完するのがバロックの造形であると論じ、本研究の意義を研究の外延の中に明解に位置付ける。

論文審査の結果の要旨

18世紀後半に、不規則、風変わり、過剰装飾を特徴とした反古典的建築への蔑称としてバロックという語が用いられて以来、今でもバロック建築を反古典主義として評価するのが大方の見方である。一方で現在の欧米の研究は、新史料の発見、厳密な史料批判、新たな考古学的な発見や分析が、徐々に新しいバロック建築観を醸成している現状にある。我が国では、バロック建築の専攻研究者も少なく、新しい研究は限られている。本論文が取り上げる建築家ボッロミーニは、バロック建築最大の巨匠であり、それゆえ、これまでこの反古典的造形の代表格として西洋建築史に位置を占めてきた。欧米での最新研究が、ボッロミーニを反古典的造形とする定説に疑義を呈し始めた機運を捉え、それらの新しい研究方法や視点を咀嚼し、新たに独自に史料批判と作品分析を行い、出版図面とボッロミーニの手稿図面の両方が存在するボッロミーニの代表作、サンティーヴォ・アッラ・サピエンツァ教会堂とカサ・ディ・フィリッピーニについて、古代に根ざす古典主義的性格がボッロミーニ作品の本質とし存在することを論証したのが本学位論文である。論文の意義・結論は高く評価できる。

美術館、博物館、図書館が Web で公開する図面やテキストの貴重な一次史料や歴史的出版物を涉猟し、適切な方法で分析を行った本論文の史料批判や図面分析、テキストや用語の分析は、これまで比較対象として等閑視されてきた古代やルネサンスの事例、あるいは他の芸術領域にまで検討の視野を広げ、説得力のある見解を本論文は多数得ている。ボッロミーニの没後、ボッロミーニ以外の人物によって出版された上記二作品の図面集が、ボッロミーニの意図とは無関係に編集・流布されたもので、これが反古典的奇想のボッロミーニという後世の評価を生み出したことの指摘、あるいは、ボッロミーニの手稿に遡っての図面分析により、ボッロミーニの作意が幾何学的な自然の模倣に基盤を置くという発見、後世のボッロミーニ評価で頻出する *capriccio* なる語は単なる気紛れを意味するのではなく、17世紀当時、古代や自然の模倣によらない独創を意味し、本来の古代芸術の知識を持っていることを前提とするという解釈、ボッロミーニの時代に理想とされた模倣すべき「自然」は、幾何学や科学と結びつく「自然」などの指摘など、本論文は傾聴すべき多くの意義深い発見、指摘、解釈を含む。

本論文が全体で論証した、ボッロミーニ自身の造形意図は古典古代に倣うことであり、古典主義的な自然観に立脚する幾何学性や古代の範例重視がボッロミーニ作品の特質であるという結論は、説得力を持って論文中で十分に論じられている。結果本論文は、建築と当時は深く関わりのある音楽などの他の芸術や文学表現にも共通に見られる美学を示唆することになり、等閑視されてきたバロック芸術の古代性や古典主義としての側面を、具体的な事例・事象に密着して描き出すことに成功している。

なお本論文の主要部分は、以下のように、レフェリーシステムの確立された学術誌に、査読有り単著論文 1編、申請者を筆頭著者とする査読有り共著論文 2編として発表されている。

① 南智子 『オプス・アルキテクトニクム』におけるボッロミーニのカサ・ディ・フィリッピ

一ニの図版－『オプス』(手稿) 図面との比較による史料的意義の考察－」『日本建築学会計画系論文集』第 88 卷・第 811 号、p.2595-2605、2023 年 9 月、DOI: <https://doi.org/10.3130/aija.88.2595> (審査論文の第二章)

- ② 南智子、西田雅嗣「ボッロミーニのカサ・デイ・フィリッピーニのオーダー－『オプス』(手稿) に記述された二つの柱頭の考察－」『日本建築学会計画系論文集』第 89 卷・第 816 号、p.378-389、2024 年 2 月、DOI: <https://doi.org/10.3130/aija.89.378> (審査論文の第三章)
- ③ 南智子、西田雅嗣「ボッロミーニ作品の capriccio—パッセリのボッロミーニ伝からの考察－」『日本建築学会計画系論文集』第 87 卷・第 802 号、p.2614-2621、2022 年 12 月、DOI: <https://doi.org/10.3130/aija.87.2614> (審査論文の第四章)